



## 聖書の文学構造「ヨセフ物語 創世記37-50章」

ウィリアム・D・レイミー著 松田出訳

THE LITERARY GENIUS OF THE JOSEPH NARRATIVE – Dr. William D. Ramey

原著: [http://www.inthebeginning.org/chiasmus/Xfiles/xJoseph\\_Narrative.doc](http://www.inthebeginning.org/chiasmus/Xfiles/xJoseph_Narrative.doc)

ヨセフ物語は世界的な文学遺産として賞賛されてきた。ヴォルテールですら、ヨセフ物語が、古代から私たちの時代まで受け継がれてきた文学の中で最も価値あるものと認めている。この点ではエジプト文学もバビロニア文学も比較にならない。失われた息子の物語に、老いも若きも感動させられる。また文学作品としても芸術の極致である。このヨセフ物語の深さ、美しさにみられる文学的特質が聖書学者によって十分に認識されているとは言いがたい。

ヨセフ物語は思いつきやでたらめによってではなく、熟考の上で設計されていることが明らかだ。ヨセフ物語が、創世記、場合によってはモーセ五書すべての中で文学的に最も高い統一性を持つ物語であることは誰も認めるところであり、したがって間違いなくヘブル語聖書すべての中で文学的な統一性が最も高い。ジョン・スキナーはこれを「旧約聖書の人物伝の中で最も芸術的かつ最も魅力的」(“Genesis”, 1969:438)と呼んだ。また、ナホム・サルナは「比類のないストーリー構造体」(“Understanding Genesis”, 1966:211)と評する。

ヨセフ物語を詳しく調べると、その技巧に驚愕する。並外れた緻密さと巧みさをもって、形式を文脈に織り込んだり、意味の中にパターンを編み込んだり、構造をテーマの中に鑄込んだりするなどは、西洋文学においてはまれである。結果としてヨセフ物語は、自らを示し、自らを解き明かすパラドックスになっている。そしてそれらすべては並行法によって記述される。さらにパラドックスの主なしくみをよく調べると、ひとつひとつの語によって問題を提示し、ストーリー全体のパターンによって最終的な解決を行なっていることがわかる。

ヨセフ物語は最も複雑に記述されている上、旧約聖書の中では比較的長い物語でもある。ヨセフ物語は特別に長い(全446節)ため、それ以前の族長時代のストーリーとは明らかに異なる。最も長い族長物語よりもかなり長いのだ。そればかりか、聖書学の資料批判の仮説が主張するように、個別に書かれた小さなストーリーが次第に継ぎ足されてこれほどの長さのストーリーができてしまったのではない。ヨセフ物語は始めから終わりまで有機的に構成されたストーリーである。その一片たりとも、ほかの部分から独立しては存在しえない。

とはいえ、この複雑なストーリーを扱いやすい大きさに区切ること自体に問題はない。文脈の中から、あるストーリーだけを意味のある最小単位に絞り込んで調べることは可能だ。たとえば、ヨセフ物語全体(創世記37:2-50:26)には、「愛される息子、憎まれる兄弟(37:2-11)」、「争いと

偽り(37:12-36)」、「義を守る:ユダとタマル(38:1-30)」などの小ストーリーが含まれる。これらのストーリーは長さも複雑さもまちまちであるが、どちらかというとき自己説明的である。

ストーリーそれぞれにはまず状況説明があり、それに続いて登場人物の行動が描かれる。必ずクライマックスと一定の結末が伴うが、そのことによってヨセフ物語全体の緊張感が失われることはない。ストーリーの動きが一時的に休止するだけだ。小ストーリーの歯切れよい連携によって全体が統御され、大きく複雑な物語が小さい意味のある部品に分割されている。物語の中でもともと一貫性の高い箇所についても記者は妥協せず、細部にいたるまで注意を払っている。ヨセフ物語全体の雄大さは、部分が互いにとけ合って全体になることによってもたらされる。

### 文学技巧としてのキアスマスの重要性

古代の歴史家や神学者が慎重な前準備を経て文書を執筆したことを今日の聖書学者は認めている。個々の内容、語法、できごとの並び順、直接話法などはすべて、物語全体を貫く神学的な意味のある方針によって制御されている。

現代西洋の読者にとってこのような文学構造はなじみがなく、不便でわかりづらい。しかし古代の読者にとってはそうではない。古代の文書形式として一般的だった文学技法の原則をひとたび習得してそれが便利だとわかれば、古代文学を見る新しい視点が開かれる。読者は、書き手の技法と意図との両方に適応しなければならない。

### キアスマスの定義

20世紀、特に最近20年ほどの間に、ある重要な文学形式が知られるようになった。これをキアスマスという。旧約と新約の構造分析によって、間違いなくすべて、あるいはほとんどすべての記者が聖書を書くときにはキアスマスを多用したことがわかっている。

キアスマスは、文体を決定する文学形式だと定義してもよいだろう。キアスマスは二つ以上の要素から成り、それらの要素ひとつひとつに対して逆の配列を持った対になる要素が存在する。一つの要素は一語であることもあり、句、文、段落、またはもっと大きな単位から成ることもある。キアスマスは直接法、倒置法、対句並行法などの形式を持った対称形をなす。キアスマスの特色は、中心概念を包むようにそれを補強するための陳述を展開する点にある。したがって常に中心、すなわち「交差点」が存在する。キアスマスの構造はギリシャ字母のキー(X)のよ

うな形をしている。

また、平行線よりもむしろ同心円をイメージする方がキアスマスを理解しやすい。中心点が存在するので、良く設計されたキアスマスは、記者が強調したい概念を浮き彫りにすることができる。聖書のさまざまな並行構造を識別し、その文学技巧の威力を正しく評価するためにキアスマスによる分析は便利であるばかりか、必須であるとさえいえる。

### キアスマスの重要性

しかし聖書学者の間では、キアスマスは見た目をよくするための単なる文学的な遊びとして見過ごされることがあまりにも多い。解釈の手がかりとしてこれらの構造に注意が払われることはほとんどなかった。実際、解釈のためにキアスマスを援用する神学研究はまれである。

分析にキアスマスを用いることは、文学の伝統的遺産を積極的に活用することなのだ。キアスマスによる分析は、読者に読んでもらいたいと記者が意図したとおりに読むための積極的かつ建設的な技術である。文法・構文分析だけでなくヨセフ物語の全体論的解釈という点では正しい評価ができないのが普通である。聖書のほかの部分とのつながりを考えることができないからだ。

### ヨセフ物語におけるキアスマスの重要性

ヨセフ物語の中に、クライマックスに向かって一定数のキアスマス構造の要素が並んでいる。クライマックスを過ぎると今度は逆の順序で要素が配列され、問題の解決とストーリーの完成に向かう。本文には明らかな統一性がある。これはキアスマス構造のためばかりでなく、ヨセフ物語全体の有機的なつながりを持った一貫性のためでもある。

たとえば、ヨセフ物語は創世記46:8-27にあるイスラエルの部族リストによって中断される。この系図情報はヨセフ物語を二分割(創世記37:3-46:7と46:28-50:26)するための境界線である可能性が非常に高い。創世記46:8-27の系図(37:1では中断していたヤコブの子らの系図。ここではクライマックスとして描き切っている)はヨセフ物語全体の中心として機能する。ほとんどすべての註解者がヨセフ物語の中心を創世記45:1-15であるとしているが、それは中心ではない。

ヨセフ物語を深く研究するとストーリーの対称性が浮かび上がってくるが、この対称性は反転のテーマによって生み出されるものだ。ヨセフが兄弟のうちで最も愛される者として「高い」境遇にいるところから物語は始まる。しかし、ヨセフは知恵と能力に恵まれているにもかかわらず、その境遇は徐々に沈んでいく。彼が底まで沈んだときに神のみわざはヨセフの境遇を反転させ始め、ついに彼を栄光の高みへと導く。

このような反転はいくつか見られるが、テーマそのものを反転させるようなキアスマスは、描く筆のタッチも太い。こ

の種の構造はさらに大きな構造に組み込まれて機能することに注意したい。たとえば創世記46:8-27の系図によって前半と後半とに分割されるヨセフ物語全体の構造がそれにあたる。

ヨセフに対する父の好意は、そで付きの長服によって表されているが、やがてヨセフはその特権を失う。これは罪のせいではなく、神の啓示を率直に言い表した(創世記37:1-11)ことによるのだ。父がヨセフを兄弟たちのもとに行かせたとき彼はほとんど殺されたも同然の状態に置かれ、最終的には奴隷とされる(創世記37:12-36)。

ユダとタマルのストーリーは直接的にはヨセフとつながっていない。しかしヨセフを隊商に売ったときに比べてユダが人格的に成長したことがこのストーリーからうかがえる(創世記38:26)。その後ヨセフはポティファルの家でしもべの長となった。しかしポティファルの妻の情欲が最終的にヨセフを監獄に送り込む(創世記39)。今度は彼は監獄において名を上げ、パロの廷臣である献酌官長と調理官長の夢を解き明かす。しかしその功績は忘れられてしまう(創世記40)。ヨセフの境遇が最底辺にまで落ち込んだことが創世記40:23で語られる。すなわち「献酌官長はヨセフのことを思い出さず、彼のことを忘れてしまった」。

しかしこのどん底がストーリーの反転の始まりとなる。パロは夢を見る。その夢が監獄からヨセフを解き放つための神のみわざであることが読む者にはわかる(創世記41)。ヨセフ投獄の事件がここで反転する。次の大きな反転が現れるのは、神がききんを用いてヨセフの兄弟たちをエジプトに送られたときだ。彼らはヨセフの夢が預言したとおりにヨセフを伏し拝む。ヨセフは彼らをだまして末の弟を連れてくるよう命じるが、これは彼らがヤコブをだまして末の弟が死んだと報告したことに対応している。彼らがベニヤミンをエジプトに連れてきたとき、ポティファルの妻がヨセフを陥れたように、ヨセフはベニヤミンを罠にはめる。ここにも反転のテーマがある。ヨセフは兄弟たちを投獄せず、逆に喜びをもって迎える。それはユダが最後にその人格を見せたとき(創世記44:33)であり、これはタマルのストーリーにおいてユダの成長が認められたこととつながっている。

ヨセフがエジプトに売られた日、ヨセフを出て行かせたヤコブであったが、今度はヤコブ自身がヨセフに会うためにエジプトに出て行く。このとき神の約束も与えられる。ヨセフの夢の預言(創世記37:10)に反して、ヤコブがヨセフを伏し拝んだことは書かれていない。そのかわり神は、ヨセフがヤコブの目を閉じるだろうと告げられた(創世記46:4)。表面的には対応のバランスが悪く見えるが、ストーリーの主要な筋は、巧妙かつ自在に、それでいて驚くべき緻密さをもって絡み合っている。これこそ読者が書き手に期待することであろう。

創世記の結末(創世記46:28-50:26)では、突然エジプトに現れた小さな集団が平和のうちに守られていたことが描かれる。彼らはエジプトの地で最も良い地(創世記47:11)を与えられた。また賓客としてすべての良いものを与えられ

た。創世記1-11の結末がいわゆるハッピーエンドでないのと同様に、ヨセフ物語の結末もすべてよしというわけではない。彼らは依然としてよそ者であり、自分の土地を持た

ない寄留者である。創世記15:13の預言は確かに重くのしかかっているのだ。問題の最終解決のためには、神による次の大きなみわざ、出エジプトを待たねばならない。

### ヨセフ物語のキアスマス構造(37:2-50:21)

導入(37:1-2)

A ヨセフに対する兄弟たちの敵意(37:1-11)

B ヨセフの死を告げられ、ヤコブ嘆き悲しむ(37:12-36)

C 休止:ユダとタマル(38:1-26)

D 予期せぬ反転(38:27-39:23)

E ヨセフの知恵(40:1-42:57)

F エジプトへ下る(43:1-46:7)

X イスラエルの系図(46:8-27)

F' エジプトでの生活(46:28-47:12)

E' ヨセフの知恵(47:13-26)

D' 予期せぬ反転(48:1-22)

C' 休止:ヤコブ、息子らを祝福する(49:1-28)

B' ヤコブ死ぬ。ヨセフが埋葬する(49:29-50:14)

A' ヨセフ、兄弟たちに念を押す(50:15-26)

反転のテーマが存在することを確認するために、二つの大きな要素(創世記37:3-46:7と46:29-50:26)の間にある重要な対応関係を見てみよう。ふたごの兄弟ベツとゼラフのストーリー(創世記38:27-30)では、長子が自らその座を捨てるが、これは第二子が長子の上に置かれたエフライムとマナセのストーリーに対応する(創世記48:13-22)。次に、ヨセフがポティファルから受けた不公平な仕打ち(創世記39)は、ヨセフの父が12人の兄弟の中でヨセフだけに与えた「不公平な」祝福(創世記48:1-12)と対照的だ。このように互いに反転するようなテーマの対が存在する(概略のDとD')。前者では長子と第二子の位置が反転し、後者ではヨセフが受けた扱いの有利/不利が反転している。

さらに創世記42-45はある程度まで創世記46:28-47:12に対応する。創世記42-45ではヤコブはまずヨセフの兄弟たちをエジプトに送り出し、彼らがヨセフによって問者の疑いをかけられて後、ベニヤミンとともに再び彼らを送り出す。彼らはヨセフにだまされ、彼の家の管理者にとらえられるが、ヨセフが正体を明らかにした後に解放される。それからヤコブ自身がエジプトに向けて出発する。

創世記46:28-47:12では、ヤコブは前準備のために先にユダを送り出す(前に彼がベニヤミンの保証人という責任を負ったように)。ヨセフは彼らを歓待する(前者では脅迫だった)。そしてヨセフのしもべにとらえられるかわりに、ヨセフの上に立つエジプトのパロに引き合わせられる。前者ではヤコブはエジプトに向けて出発したところで終わっているが、この箇所では、ヤコブが最も良いラメセスの地に移り住むところで終わる。

### キアスマスを分析する

ほかのキアスマス構造と同じく、ヨセフ物語にも折り返し点がある。折り返し点を境に、それ以前と以後とは逆の配列で同じテーマが展開する。ヨセフが正体を明かす(X)前にA、B、C、D、E、Fの六つのストーリーがあり、その後も六つのストーリー(F', E', D', C', B', A')がある。キアスマスはしばしば回文にたとえられるが、この場合は通常の場合とは異なり、音韻ではなくテーマによる対称性を持つ。このキアスマスによって、もともと統一性が明らかでないストーリー全体がさらにしっかりと結び合わされる。

A~Fのすべては、ヨセフが試練を経て兄弟たちの罪を取り扱い、悔い改めに導くための地位に上ることができるように構成される。F'~A'はその解決である。ヤコブの家族はエジプトに移住し、ゴシェンの地に落ち着く。ききんは続く。しかしヨセフは彼らを養う。ヨセフの子らはヤコブの祝福を受ける。ヤコブは息絶える。110歳まで生きた後ヨセフも死ぬ。

記者は、ヨセフ物語を創世記の中に芸術的な手法で編入しただけではない。創世記全体の最後の言葉「エジプトで」は、ヨセフ物語の最後にもふさわしく、かつ、出エジプト記へと自然にストーリーを接続するものである。

キアスマスの構造は、次のような原則にしたがっている。

1. それぞれのストーリーのはじめに、その大筋が示される。対になって並行するストーリーは、ヨセフ物語全体の始まりと終わりから中心に向かって、A-A'、その内側にB-B'、さらにその内側にC-C'、のように配列されている。
2. あるストーリーの中で対概念やモチーフやアウトラインなどが示された後、そのストーリーの対である後半のストーリーの中に、それらを指し示すようなテーマが出現する。した



がってテーマは重要度の順に並んでいるわけではない。それらは前半のストーリーで示された順序、つまり、キアスマスの対の最初のアウトライン(A-A', B-B', C-C'のうち、ダッシュのない方)に現れた順序で現れる。いくつかの例外を除いて、ヨセフ物語がこのようにいろいろなテーマを用いる目的は、ストーリーをグループごとに制御するためであると推測される。多様なテーマによって各ストーリーが単なる言葉の羅列にはならず、対応したストーリーごとにグループを形成するのだ。

このようにストーリーの並行関係による対応が明らかになってはじめて、FとF'の間に置かれた中心部(X)、すなわちヨセフ物語全体の折り返し点を発見することができる。

3. 対とは別の構造を表すキーワードが存在する。つまり、A-A', B-B', C-C'のようなストーリーの対を示すのではなく、AからBへ、BからCへ、・・・F'からE'へ、E'からD'へ、・・・のようにストーリーを接続していくキーワードである。これらはキーワード(索引語)と呼ばれるもので、ストーリーの対概念ではなく、直線的な展開の方向を示す機能を持つ。

以上のように、入り組んだストーリー構造がテーマおよびキーワードによって組み上げられているので、これらの概念について少し述べておきたい。テーマやキーワードにはいくつかのタイプがある。最も目立つタイプは、対にされたり連続したりするストーリーどうしの中で同じ単語をくり返すという方法である。もうひとつのタイプは、同じでない単語や、語幹は同じだが語形変化した単語を標識として使う方法だ。まったく異なる語根から派生していても音が似ている単語どうしが、テーマやキーワードとして使われている例は存在する。さらに、意味や含蓄が似ているだけ、という場合もある。このようにいろいろなテーマやキーワードの形態があるが、すべてに共通するのは「連結する」という機能だ。これらが使い分けられてストーリーの各部分が、全体を有機的に構成している。

### ヨセフ物語のキアスマス構造の並行関係

#### 要素 A-A'

A ヨセフに対する兄弟たちの敵意(37:1-11)

A' ヨセフ、兄弟たちに念を押す(50:15-26)

これら二つの要素は、それぞれヨセフ物語の導入および結びとして機能する。Aにおいてヨセフが紹介される(創世記30:22-24の誕生は別とする)。彼は17歳の「若者」**נער**である。一方、A'において彼はバロに信頼される助言者として登場し、110歳まで生きたことが述べられる。この対称は印象深い。生涯を通してヨセフが高く上げられたことを示している。

Aの流れはA'でもくり返される。両者においてヨセフは兄弟から離れて単独である点と、父ヤコブが登場しない点が重要だ。また、Aにおいて父と息子はかりそめの「死」によって離別し、A'において父と息子は実際の死によって離別する。

すべてのテーマがストーリーどうしを強く連結している。

- 37:1の「カナン(の)の地(のうち)に」は、50:13で「カナン(の)の地へ」に変わる。
- 「悪い」という語が両者において三回ずつくり返される(37:2,20,33; 50:15,17,20)。
- A(37:2,4)とA'(50:15)の両方において「彼らの父」という表現が目立つ。
- 37:4に「彼の兄たちは見た」とあり、50:15「ヨセフの兄弟たちは見た」とある。
- A(37:4)の動詞語幹「話す」**דבר**が、A'(50:17,21)でくり返される。
- A(37:7,9,10)ではヒシュタベル態の語幹「ひれ伏す」**הרה**がヨセフの夢で兄弟たちがひれ伏す描写に使われ、A'(50:18)では兄弟たちが来てひれ伏す描写にも使われる。

#### 要素 B-B'

B ヨセフの死が告げられる。ヤコブ嘆き悲しむ(37:12-36)

B' ヤコブ死ぬ。ヨセフが埋葬する(49:29-50:14)

リベラル派の聖書批判がむやみと引き起こした多くの問題を解決する上で、キアスマス構造に注目することがどれほど役立つかが、これまでも示されてきた。テキスト解釈上の二次資料問題については特にそうだ。このような例としては、突然登場する見知らぬ人物(創世記37:15-17)をめぐる解釈がある。兄たちを探すヨセフに道を教える人物のことである。文脈をよく読めば、この箇所が不可欠な要素であることはわかるはずだ。この人物は、創世記50:11「その地の住民のカナン人」に対応してBとB'のバランスを維持している。もう一点ある。リベラル的解釈では、創世記50:11も二次資料として付け足されたのだと決め付けるが、BとB'を連結するために設計された数々のテーマ群の中で、後代につぎはぎされた「二次資料」が適切な対応関係を保っているのは奇妙な話である。

BとB'を対応づけるテーマは次のとおり。

- 37:15-17で、ひとりの人がヨセフを助ける。50:11では、ヨセフとバロの家臣団がヤコブの死を嘆くのを地元のカナン人が見る。
- 動詞語幹 **נכל** (謀る)のヒトパエル態が37:18で使われ、無関係だが音が似ている動詞語幹 **כול** (食べさせる)が50:21で使われる。
- 同様に動詞語幹 **נכר** (調べる)が37:32-33で使われ、50:5でヨセフはヤコブの言葉を引用して **כריתי** (私は掘った)を使う(動詞語幹は **כרה**)。
- 動詞語幹 **אבל** (喪に服する)が、37:34-35にあるヨセフのためのヤコブの嘆きと、50:10-11にあるヤコブのためのヨセフの嘆きとを連結する。

## 要素 C-C'

C 休止: ユダとタマル(38:1-26)

C' 休止: ヤコブ、息子らを祝福する(49:1-28)

ヨセフ物語の「C-C'」とストーリー全体との関わりは、一見ただけでははっきりわからない。ヨセフが登場せず、CとBの連結はある(下記参照)にはあるが、とにかく創世記38:1-30さえなければヨセフ物語はうまく収まるように見える。ユダとタマルの唐突なエピソードはヨセフ物語の中でも特異であり、ストーリーの流れを妨げるようだが、これは無意味な付け足しではない。たしかに流れの脱線ではあるが、背景の説明として必要な箇所だ。その関連は後になって判明する。

もう少し直接的な例であるが、前に述べたB'もまた流れからの逸脱といえる。同一テーマの48:21-22と49:29には含まれていることから、B'がストーリーをさえぎっていることがわかるのだ。ヨセフは38:1-30(C)にまったく登場せず、49:1-28(C')にはわずかにその名前が言及されるにとどまる。D'とA'においてヨセフが目立っているのは対照的だ。創世記49:1-27は明らかに独立した祝福の詩である。このことは英語版聖書(ヘブル語聖書と同様)の翻訳形式からも読み取ることができる。この詩はカナンのできごとを述べており、38:1-30でのカナンにおけるユダの生活に対応する。きわめてエジプト色の強いヨセフ物語の中では唯一、C-C'のエピソードにはエジプト的要素がまったくない。

創世記37章以降においてもうひとつ重要なテーマは、誰がヤコブの長子なのかという点だ。最終的にヤコブは12人の息子を授けられたのであり、長子の権利の行方はどうでもよい問題ではなかった。これを詳しく扱ったのはジュダ・ゴルデンである。本書のこれ以降の箇所は、ゴルデンの著作「The Youngest Son or Where Does Genesis 38 Belong (JBL 96 1977:27-44)」に負うところが大きい。

まず、明らかに長子の権利を持つべきだと思われるのはルベンである。彼は実際の初子だからだ。しかしルベンは許し難いことを行う。彼は自分が兄弟たちのリーダーであることを示威するために、ヤコブのそばめビルハと寝た(創世記35:22)。父のそばめと寝ることは、父の権威を奪い取ることを意味する。これは性的衝動によるものではない(参 IIサムエル16:21-22, I列王2:20-22)。本文が暗示的に表現(「イスラエルはこのことを聞いた」)しているように、ルベンのたくらみは裏目に出る。このときからずっとヤコブはルベンに好意を抱かなかった。それは、ルベンが行なったことにだけによるのではなく、彼がレアの息子だったことにもよる。ヤコブはレアをめとるつもりはなかったからだ。そのかわりヤコブは、長子の権利を持つ者に見せるようなあらゆる好意をヨセフに向けた。ヨセフは、ヤコブが愛したラケルの息子だったからだ。

兄弟たちすべてにとって最年少のヨセフに従うことなどは耐えられないことだった。特に長子の座を奪われたルベンにとってはそうである。ところが、兄弟たちが憎しみを爆

発させてヨセフを殺そうと謀ったとき(創世記37:12-20)、ルベンはこれを父の好意を取り戻すためのチャンスと見て「ヨセフを彼らの手から救い出し、父のところに返す(37:22b)」ことを考えた。しかしこれはルベンの善行ではなく、長子の権利を得るための手口であると理解しなければならない。

この企ては失敗する。ルベンのいない間に、ユダが兄弟たちを説き伏せてイシュマエル人の隊商にヨセフを売り、ルベンは英雄になるチャンスを失う。ユダがルベンの企てを察知していたかどうかは不明だ。したがって、ルベンの裏をかくために彼がヨセフを売ったのか、あるいはあわれみを示したということなのかはわからない。ユダがルベンの計画を壊すことだけを目的としていたのであれば、自分の手でヨセフを救い出して父に返すか、または直ちにヨセフを殺すかしたはずである。

ヨセフが消えてしまったときのルベンの狼狽ぶりは明らかだ。彼は「私はどこへ行ったらよいのか(創世記37:30)」と嘆く。この嘆きはヤコブの好意を得ることができなくなったことに対するものだ。それ以来ずっとルベンは哀れである。創世記42:37で彼は、兄弟たちが二度目のエジプト行に際してベニヤミンをエジプトに連れ下ることを認めるようにヤコブを説得するがうまくいかない。ベニヤミンを連れ帰らなかったら自分の子ら(つまりヤコブにとっての孫)を殺してもよいと申し出るが、これはひどい話であった。ゴルデンは「やけくそになった人間だけが口にできる言葉」と評しているが、これは正しい。ヤコブはこの申し出をしりぞけた。

ヤコブは死の床にあって「祝福」を与えながらルベンを非難する。ルベンは最初に生まれた子には違いない。そしてすべての榮譽を長子の権利とともに受け継ぐはずであった。しかしそれを得ることに性急になって父のそばめと寝たことは決して見過ごされることがなかった。このようにしてルベンはしりぞけられた(創世記49:3-4)。

次に長子の候補となるのはシメオンとレビであるが、彼らはすでに除外されている(創世記49:5-7)。創世記34章の事件を引き起こしたためだ。そうすると3番目の候補はユダである。

ユダへの祝福は、次第に好意の度合いを増していくように描かれる。ユダがヨセフを売ったことは非難を免れないが、それは少なくともあわれみの表れでもあった(創世記37:26-27)。ユダの二人の息子エルとオナンは悪行がひどかったので主は彼らを殺した(創世記38:7-10)。しかしユダは判断を誤り、息子たちの死はタマルのせいだと思いつつ、ここで3番目の息子シェラから子を起こそうとはしなかった。ようやくユダ自らがタマルを身ごもらせてから、彼はタマルが正しく自分が間違っていたことを認めた(創世記38:26)。

副次的ではあるが、オナンのストーリーもまた長子の権利という重要なテーマを扱っている。オナンの罪には、性的倒錯や産児制限という意味はない。自分自身のために長子の権利を奪い取ろうとしたことがオナンの罪であった。エル



が死んだ後オナンは、エルの子が生まれない場合は、長子の権利が自分のものになると知っていた。生物学的に言えばタマルに生まれた子はオナンの子であるが、掟によればその子は間違いなくエルの子とされる。つまり長子の権利はオナンを飛び越えてエルの子に与えられるのだ(創世記38:9)。

この後ユダは兄弟たちのリーダーとして頭角を現している。ルベンは前にヤコブに無視されたが、創世記43:3-10においてユダの発言は聞き入れられ、兄弟たちがベニヤミンを二度目のエジプトの旅に連れて行くことが認められる。それだけにとどまらず、ユダは長子の権利を受けるにふさわしい者らしく、ベニヤミンに災いがふりかかったら一生ヤコブに対して罪ある者となってもよい、という誓いを積極的に行う(創世記43:9)。ヨセフがベニヤミンを罫にかけて責めたとき、ユダはベニヤミンの身代わりとして自分を差し出すという請願を試みる。また、ヤコブ自身もエジプトに下っていきこうというとき、彼はユダを信頼し、準備のためにユダを先につかわした(創世記46:28)。ユダはすでに長子としての威厳を得ていた。

創世記38章(C)と48:1-28(C')の間にはどのような並行関係が見られるだろうか。中心テーマはタマルによって生まれたふたご、ペレツとゼラフである。ゼラフは最初手を出したので、そのまま胎を出て長子になるはずだった。彼の手首には赤い糸が結びつけられた。しかし驚いたことにはペレツが割り込んで先に出てきたために彼は長子となった。

この不思議なできごとは、ペレツを長子とした神の選びのしるしである。これはイサクとヤコブにも共通したパターンだ。両者はもともと長子ではなく、神の選びのみわざによって長子の座を獲得したのである。より若い者が選ばれるという現象は、この後もくり返し聖書の中に現われる。ダビデの選び(1サムエル16:11-12)はその一例である。

ペレツとゼラフのストーリーはヤコブとエサウのストーリーを連想させるという点で重要だ。両方のストーリーにおいてふたごが登場し、長子の権利を受けると思われた者がそれを失う。両者には「赤い色」が関わっている(創世記25:25; 38:30)。そしてペレツは、その祖父ヤコブと同じように自分の兄弟を出し抜いた。

したがって、ヨセフ物語における創世記38章は、ユダがどのようにして長子の座にふさわしい人物になっていったかを裏付けるといって重要だ。ペレツとゼラフの不思議な誕生のストーリーの後に続く「年少の息子」に注がれる恵みのストーリーもまた、「選ばれた系図」の奇跡の歴史が、まさに12人の中から選ばれたユダから始まろうとしていることを示している。

ヨセフの息子たちへのヤコブの祝福(創世記48)とユダへの祝福(創世記49:8-12)の両方において、このことを確認することができる。ヨセフへの深い愛のゆえに、ヤコブは特別大きな祝福をヨセフに与えたいと考える。神の特別

の恵みが年長の者から年少の者に移る、という神の選びの原則を適用することによってそれを成し遂げようとした。ヤコブの解決は、手を交差させ、弟のエフライムを長子として祝福することであった。

しかし、ヤコブは12人の息子をそれぞれ祝福するとき(創世記49:1-28)、ペレツとゼラフの不思議な誕生に現われた原則に逆らうことはできなかった。正統な長子の権利はユダに与えられた。兄弟たちはユダをほめたたえ、彼の前にひれ伏す。統治者の杖は彼のものだ(創世記49:8,10)。そしてヨセフには特別な贈り物が与えられる(創世記49:22-26)が、長子の権利ではない。以上のことからいえるのは、創世記38章と49章は、創世記37章以降のヨセフ物語において、対になったひとつのストーリーであることに議論の余地はないということだ。38章と49章を適切に解釈できれば、ヨセフ物語の主要なテーマのひとつが宙ぶらりんのままになってしまうのだ。

ユダを除くすべての兄弟たちに与えられた祝福を述べた箇所(創世記49:1-7, 13-28)にキアスマスとして対応する箇所が38章には存在しないことを先に指摘しておいたが、その理由はこれではっきりしたといえる。創世記38章と49:8-12はどのようにしてユダが長子の権利を得たかについての説明なのだ。創世記38章が49:1-7, 13-28に現れないことは特に不思議ではない。

ユダとタマルのストーリーと、ヤコブによる祝福のストーリーとはまったく違う話のようだ。ストーリーの中断や、カナンに関するでき事という共通点はあるにしても、両者のつながりを示すテーマやテーマとなる単語が見つからないようにすら見える。しかし決してそうではなく、以降に掲げるように、CとC'の間には驚くほど多くの共通要素があり、それはヨセフ物語の他のストーリーのどの対よりも多い。

CとC'の共通要素がユダに関連することがわかった以上は、創世記49:8-12にある4番目の息子に関連するヤコブの言葉を調べていくのが妥当であろう。この箇所には難解な部分が多いが、ここ20年の研究により、いくつかの疑問は解けている。この箇所をユダとタマルのストーリーと関連づけて読むことが、問題解決の鍵となったのだ。

1. ユダへの祝福の言葉を創世記38:1-30に関連づけて見るための鍵は、伝統的に「シロ」と読まれる単語 **שִׁלָּה** (49:10) と、「シェラ」 **שֵׁלָה** (38:5,11,14,26)との類似性にある。
2. 「杖」はユダを離れない(49:10)。これは38:18においてタマルに与えられた品々がユダ自身を指し示した(38:25)ことに対応する。
3. 「(杖は)その足の間を離れることはない」(49:10)には確かに性的な含蓄があり、38:15-19においてユダが遊女のところにはいったことと呼応する。
4. 「彼のろば」 **עִירָה** (49:11)は、ユダの長子「エル」 **עַר** (38:3,6,7)につながる。
5. 上と同じく、「彼のろばの子」 **בְּנֵי אֶתְנִי** (49:11)は、ユダの2番目の息子「オナン」 **אֹנָן** (38:4,8,9)を連想させる。

6. 「ぶどうの木、茎」**שרקה** (49:11)はソルクの谷を示し、それは38:12-13のティムナの地を連想させる。
7. カル態の「離れる」(49:10)の語幹**סור**は、ヒフィル態の「取り除く」という単語となつて38:14,19に現われる。
8. 「彼は来る」**יבא** (49:10)は、「彼は来た」**ויבא** (38:18)に対応する。
9. 「彼の着物」**סותה** (49:11)は、語原学的には「彼女はベールをかぶった(おおった)」**כסתה** (38:15)との関連はない。しかし、両方とも3つの共通した子音字を持ち、いずれも着衣に関する表現である。
10. 「着物」の語幹**לבש**が49:11と38:19の両方に現われる。
11. 「長子」**בכור**が49:3と38:6に現われる。
12. 「わが力」**אני** (49:3)は「オナン」**אונן** (38:4,8,9)を表すとみられる。
13. 「力のある、激しい」**עז**という語が49:3,7にあり、一方、38:17,20では「やぎ」**עזים**という似た語がある。
14. 「たわむ」(49:15)と「向く」(38:1,16)とは同じ単語**ניט**である。
15. 「道のかたわら」**עלי ררך**が49:17にあり、「道ばた」**אל הדרך**が38:16にある。
16. 頭韻法の文「ガドについては、襲う者が彼を襲うが、彼はかえって彼らのかかとを襲う」**גד גודד יגודדו** (49:19)は38:17,20,23の重要単語「子(やぎ)」**גדי**を示す。
17. 「彼は襲う」**יגר** (49:19)は「告げられた」**ויגר** (38:24)を連想させる。

以上のように、17にのぼる数の関連が存在し、創世記38:1-30と49:1-28の並行関係を浮き立たせている。ヨセフ物語に含まれる他のストーリーの対と比べると、この並行要素の数はきわ立って多い。おそらく、ユダとタマルのストーリーと、ヤコブによる祝福のストーリーとが似ていないため、通常よりも多くの単語とテーマによる関連づけの構造が必要だったのだ。

少なくとも、C-C'以外の並行要素は、ストーリーによって互いの類似性が十分はつきりしているため、あらためて多くのテーマ語を盛り込む必要がない。しかしC-C'がほとんど類似していないからこそ、記者はそれらの対応関係を意図的に示すために、このようなテーマ語による関連づけを行なったのである。一般に註解者は、C-C'がヨセフ物語に割り込んでいることについて言及しないものだが、両者が互いに呼応することに気付かなければならない。

#### 要素 D-D'

- D 予期せぬ反転 (38:27-39:23)
  - ベレツとセラフ (38:27-30)
  - ポティファルの妻無罪、ヨセフ有罪 (39:1-23)
- D' 予期せぬ反転 (48:1-12)
  - ヤコブ、ヨセフを愛する (48:1-12)
  - エフライムとマナセ (48:13-22)

前半部(D)において、登場人物の立場が逆転する。ヨセフは無罪であるのに有罪、ポティファルの妻は有罪なのに無罪である。後半部のD'において、2番目に生まれたエフライムが長子とされ、長子であったマナセが2番目に引き下げられる。しかし、両者においてヨセフは究極的に優越しており、そのゆえに立場の逆転が生じている。両者においてストーリーはベッドの周りで展開する。D'ではヤコブが病床に横たわり(創世記47:31)、ヨセフがその傍らにあり、状況が明らかである。Dの状況描写はもっとあいまいになる。ポティファルの妻はおそらくベッドにいるか、またはそのことを思い描いており、ヨセフは彼女の傍らにいる。

DとD'とを連携させるテーマ語は次のとおりである。

1. 「祝福する」の語幹**ברך**は両者において重要であり、39:5および48:3,9,15,16,20に現われる。
2. 「彼は拒んで言った」**ויאמר ויאמר** (39:8)は、興味深い対応がある。「彼の父は拒んで言った」と同じ語である。
3. 「ヨセフは主人にことのほか愛された」**יוסף הן בעינין יוסף וימצא** (39:4)とあり、47:29において「もしあなたの心になうらなら」**הן באיניך** **נא מצאתי הן באיניך**が見つかる。
4. 「恵み」**חסד**が39:21、47:29の両方に現われる。
5. 「寝る」の語幹**שכב**がDにおいて目立つ。39:7-14の間に4回くり返されるが、47:30(D')においても呼応する単語がある。
6. 「手」**יד**はDにおいて非常に多く、9回現われる重要単語である。同様にD'においてもヤコブの交差した「手」によって立場の逆転がもたらされ、ヤコブに対するヨセフの誓いの場面(47:29; 48:14,17)にも現われるので、重要性が確認できる。
7. 「パン(食物)」**לחם**が比喩的に「妻」の意に使われ(39:6)、「ベツレヘム(パンの家)」**בית לחם**が48:7に現われる。

ヨセフ物語の構造を調べることによって、聖書学者を悩ませてきた問題をもうひとつ解決することができる。フォン・ラッド、デヴィッドソン、ヴォーター、スキナーらによれば、創世記48:7のラケルの死と埋葬に関するヤコブの語りは場違いであり、前後との脈絡がわかりにくいという。A. デイルマンは全体としては、ヤコブの言及をさほど重視していない。それでも「何かの理由が欠落しているが、無意味な飾りではない」と述べる。しかし注釈として、ヤコブの「ベツレヘム」という言葉はヤコブが語ったものではなく、後代になって付け加えられたという(“Genesis II”, 437-38)。

「無意味な飾りではない」という見方はもっともだ。わざわざ直接話法を使って無意味な言葉を記述することは考えられない。ここで要素Dにある「パン」**לחם** (39:6)と「妻」の用法に注意したい。この単語は含みの多い使われ方をしている。これによって要素D'の48:7において「ベツレヘム」**בית לחם**という単語が挿入された理由は明らかだ。「パン」と「ベツレヘム」がDとD'を接続するのである。

## 要素 E-E'

E ヨセフの知恵 (40:1-42:57)

E' ヨセフの知恵 (47:13-26)

ヨセフ物語では、2回にわたってヨセフがエジプトをききんから救って国家的英雄となったストーリーが記述される。比較的片方が長く、もう一方は短い、両者は並行する。並行関係を示すテーマ語は次のとおり。

1. 「ききん」という単語はEのいたるところに現われ、またE'において47:13,20に見られる。
2. 「パン」**לֶחֶם** はEの41:54-55で2回使われ、E'でも多く使われる。
3. 「彼はつるす、つるされるだろう」**תִּלְוָה** が40:19,22に現われ、「衰えた」**לָוָה** が47:13に現われる。両者は完全押韻である。
4. 「穀物を買う／売る」の語幹 **שָׁכַר** が41:56-57と47:14において見られる。
5. 「茎」**קִנְיָה** が41:5,22に現われ、「買う」の語幹 **קָנָה** が47:19,22,23に現われる。
6. 「町々」**עָרִים** が41:48と47:21の両方に見られる。
7. 「エジプトの地」**אֶרֶץ מִצְרַיִם** または「地」がEとE'の両方に非常に多く現われる。E'には「地」**אֲדָמָה** も多くの変形として現われる。
8. 語幹 **שָׁחַט** は、「五つに分割する」意味であり、41:34と47:24,26に現われる。

創世記40:1-41:57と47:13-26の間の類似性は明らかであり、共通したテーマ語はその類似性をさらに強めこそすれ、弱めることはない。ヨセフ物語の構造に注意を払うことによって、むやみと話を難解にせずすむ。たとえばレッドフォードは、創世記47:13-26の「農地改革」はヨセフ物語に継ぎ足されたと考える(“A Study of the Biblical Story of Joseph”, 1970:180)。しかし構造を見れば、創世記47:13-26は、ヨセフがエジプトの英雄として初登場する40:1-41:57のストーリーと対になる必要不可欠な部分であることは一目瞭然だ。

創世記47:13-26の17個の節は、テキストが後代に継ぎ足されたと考える立場の人々からは一般に「J文書」と呼ばれる。彼らは、創世記47:13-26は41:56の後に挿入されるべきなのに誤って現在の場所に入れられたのだ、という仮説を主張する。しかしこの仮説はその他の聖書学者によって強く否定され、事実上は支持されていない。

## 要素 F-F'

F エジプトへ下る (42:1-46:7)

F' エジプトでの生活 (46:28-47:12)

ヨセフ物語が展開するにつれて、兄弟たちの二度にわたるエジプト行のストーリーが現われる。1回目は食糧購入に出かけ、2回目はシメオンを解放するためにベニヤミンを伴って行く。この二つのストーリーの並行はヤコブの家族がエジプトに移住し、ゴシェンの地に住むようになった

経緯を説明するものだ。はじめのストーリー (F) は、おもに系図にかかわる人物の情報であり、次のストーリー (F') はヤコブとその息子たちがバロに引き合わされたときの描写である。

FとF'を対応させる要素は多い。

1. 「下って行く」**יָרַד** と「エジプト」**מִצְרַיִם** (42:1-2) の二語が、46:3においては「エジプトに下って行く」**מִצְרַיִם יָרַד** のように連語に置き換えられている。
2. 兄弟たちはヨセフに対して自分たちを「あなたのしもべども」と呼び(42:10,11,13)、バロに対しても同じように言う(46:34; 47:3,4)。
3. ユダは目立った働き(43:3-10)をし、46:28でも同様。
4. 「送る」の語幹 **שָׁלַח** は、ヤコブがユダを先頭にして息子たちを送り出したこと(43:4-5)と、ユダを先に遣わして道を示させたこと(46:28)とを関連づけるために使われる。
5. 「私の顔を見てはならない」というヨセフの言葉がヤコブへの状況説明の場面(43:5)で引用され、46:30ではヤコブ自身の言葉「あなたの顔を見た」として使われる。
6. 上記と同じく、ヨセフの言葉「あなたがたの父はまだ生きているのか」はヤコブに対する説明(43:7)の中で引用され、「あなたがまだ生きている」(46:30)というヤコブ自身の言葉としてくり返される。
7. 「口の」**פִּי** は袋の口という意味で使われ(44:1,2,8)、45:21では人間の口の意味で使われる。
8. ベニヤミンはFにおいて、特に44:12では重要な役割を負う。また、ユダの陳述ではベニヤミンが最年少の弟であることが述べられる(44:18-34)。ベニヤミンはF'の45:22においても特別に扱われる。

ここにおいても、キアスマス構造を観察することによって、批評学者が持ち出す問題をいくつか解決できる。ある批評学の意見によれば創世記46:1-27は二次資料だという。すなわち「創世記46章の初めにおいて、ヨセフ物語とは別の話が始まる・・・したがって明らかに、この箇所はヨセフ物語に含まれない」(“A Study of the Biblical Story of Joseph, 1970:18-22”)。

Fにおいて兄弟たちは「2回」エジプトに行く。したがって対応するF'のエジプト移住のストーリーにおいてもエジプトに「2回」行くモチーフがなくてはならない。しかしF'においてヤコブの家族がエジプトに移住する出来事は1回だけであり、移住についての説明も一つだ(創世記46:28-47:12)。しかし42:1-43:34にある2回のエジプト行とバランスを取るように、移住した家族の系図の説明の前後に工夫を加えている。エジプト移住は1回だが、それについての説明が2回くり返されるのだ。つまり、創世記46:6「エジプトに来た」(折り返し点Xに属する46:8,27も同様の機能)が1回目のエジプト行に、46:28「ゴシェンの地に行った」が2回目のエジプト行に対応する。



**要素X****X イスラエルの系図(46:8-27)**

ヨセフ物語の折り返し点の位置は、まさにストーリー全体の中心部、創世記46:8-27にあり、ヤコブの系図が紹介される。ここで、前半部と後半部のバランスのしくみを調べる前に全体の構造を詳しく見てみたい。創世記46:8-27がキアスマスの中心であることを確認するためには、前半部と後半部それぞれのクライマックスがどこであるかを特定しなければならない。

前半部の創世記36:1-46:8におけるクライマックスは、42:1-44:34の極度の緊張状態(兄弟たちの出現)を破るヨセフの登場(46:1-7)という箇所にある。ヤコブがエジプトに向けて出発するとき与えられる神の守護の約束(創

世記46:1-7)は、前半部で生じたストーリーの緊張をすべて打ち消す「反クライマックス」の機能を持つ。したがってその直後に現われる系図情報は、前半部のストーリーをいったん完結させるための境界線なのだ。

創世記46:28-50:26の主題は、息子たちへのヤコブの祝福である(創世記48-49)。イスラエルの家族がエジプトの地に長く定住してまもなく族長は死ぬ。「わずかな人数しかいないのに、将来はいったいどうなるのか、そもそも将来などあるのだろうか」などの疑問にヤコブの祝福が解決を与え、族長イスラエルのストーリーを完結させ、国としてのイスラエルの将来へと読者の視点を移動させる。

**ヨセフ物語に含まれる各ストーリーの構造****[創世記37:2b-11(ストーリー1)の構造]**

導入:カナンにおける家族の中でのヨセフの背景(2b-e)

- A ヨセフに対するイスラエルの寵愛(3)
- B ヨセフに対する兄弟たちの憎しみ(4a)
- C ヨセフに対する兄弟たちの沈黙(4b)
- D ヨセフの最初の夢への兄弟たちの反応(5)
- E ヨセフの最初の夢の詳細(6-7)
- X 激しくなる兄弟たちの憎しみ(8)
- E' ヨセフの2番目の夢の詳細(9-10a)
- D' ヨセフの2番目の夢へのヤコブの反応(10b)
- C' ヨセフへのヤコブの語りかけ(10c)
- B' 兄弟たち、ヨセフをねたむ(11a)
- A' ヤコブ、このことを心に留める(11b)

**[創世記37:12-36(ストーリー2)の構造]**

導入:ヨセフの兄弟たち、シェケムの牧草地に出かける(12)

- A ヨセフに対するイスラエルの命令(13a-b)
- B 父、忠実な息子ヨセフを送る(13c-14)
- C ヨセフ、兄弟たちを探し、見つける(15-17)
- D ヨセフを除くための兄弟たちの最初の企て(18-22)
- X ヨセフへの兄弟たちの乱暴(23-24)
- D' ヨセフを除くための兄弟たちの2番目の企て(25-28)
- C' ルベン、ヨセフを探すが見つからない(29-30)
- B' 忠実でない息子たち、父にヨセフの長服を送る(31-33)
- A' ヨセフについてのヤコブの嘆き(34-35)

結び:ヨセフ、売られてエジプトへ行く(36)

## [創世記38:1-30(ストーリー3)の構造]

導入: ユダ、父と兄弟たちから離れる(1-5)

A 子のないやもめ(6-11)

a タマル、やもめの服を脱ぎ、遊女の服を着る(14)

b ユダ、タマルを遊女として買う(15-16b)

B x ユダ、約束のしるしを与える(16c-18b)

b' ユダ、タマルとともに寝る(18c)

a' タマル、遊女の服を脱ぎ、やもめの服を着る(19)

a 約束の子やぎを送るがタマルは見つからない(20)

b アドラム人、遊女を探す(21a)

X x アドラム人への答え(21b)

b' アドラム人、ユダに状況を報告する(22)

a' 約束のしるしは戻らず、タマルは見つからない(23)

a ユダ、タマルが売春によって身ごもったことを告げられる(24a-b)

b ユダ、タマルを焼き殺すよう命令を発する(24c)

B' x ユダ、タマルの示すしるしを見て自分のものだと思える(25-26a)

b' ユダ、タマルが自分より正しいことを公に認める(26b)

a' ユダ、タマルと二度と関係を持たない(26c)

A' やもめにふたごが生まれる(27-30)

## [創世記39:1-23(ストーリー4)の構造]

状況説明: ヨセフ、イシュマエル人によってエジプトのポティファルに売られる(1)

A ヨセフ、ポティファルの家で成功する(2-6a)

B 解説: ヨセフは美男子だった(6b)

C ポティファルの妻の欲望(7a)

D ポティファルの妻、ヨセフに言い寄る(7b)

X ヨセフ、罪を犯すことを拒否する(8-9)

D' ポティファルの妻、ヨセフに言い寄る(10-12)

C' ポティファルの妻の欲望、拒絶される(13-18)

B' 解説: ヨセフ、王の監獄に入れられる(19-20a)

A' ヨセフ、ポティファルの監獄で成功する(21-23)

## [創世記40:1-23(ストーリー5)の構造]

A ヨセフ、献酌官と調理官に出会う(1-4)

B 献酌官と調理官、同じ夜に夢を見る(5-8)

C 献酌官長の夢のときあかし(9-13)

X ヨセフ、献酌官長にとりなしを願う(14-15)

C' 調理官長の夢のときあかし(16-19)

B' 献酌官と調理官の夢、同じ日に成就する(20-22)

A' 献酌官、ヨセフを忘れる[調理官は死ぬ](23)

## [創世記41:1-57(ストーリー6)の構造]

- A パロの夢(1-8)
- B 献酌官長、ヨセフのことを思い出す(9-13)
- C ヨセフ、パロの前に出る(14)
- D パロ、自分の夢の詳細を語る(15-24)
- E ヨセフの解き明かしと助言(25-36)
  - X ヨセフに神の霊が宿っていること(37-38)
- E' パロ、ヨセフの力を認める(39)
- D' パロ、ヨセフにエジプト全土を支配させる(40-45)
- C' ヨセフ、パロの前を去る(46-49)
- B' ヨセフ、神の御恵みのゆえに苦しみを忘れる(50-52)
- A' パロの夢、現実となる(53-57)

## [創世記42:1-38(ストーリー7)の構造]

- A ヤコブ、息子たちをエジプトに食糧購入に行かせる(1-5)
- B エジプトにおけるヨセフの支配(6)
- C ヨセフ、兄弟たちを見つけて夢を見た時のことを思い出す(7-9a)
- D ヨセフ、兄弟たちに問者の容疑をかける(9b-13)
- E ヨセフの第一の試し(14-16)
  - X ヨセフ、兄弟たちを監禁する(17)
- E' ヨセフの第二の試し(18-20)
- D' 兄弟たち、罪を告白する(21-22)
- C' ヨセフ、兄弟たちから離れて泣く(23-24)
- B' 「国の支配者」による兄弟の取扱い(25-34)
- A' ヤコブの前で食糧の袋が開かれる(35-38)

## [創世記43:1-34(ストーリー8)の構造]

- A ききんはひどかった(1-2)
- B イスラエル、ベニヤミンを兄弟たちとともに行かせる(3-15)
- C ヨセフ、ベニヤミンを見る;食事の用意がなされる(16-17)
- D 兄弟たち、ヨセフの復讐を恐れる(18)
- E 兄弟たち、ヨセフの家の管理者に家の近くで語る(19-22)
  - X 管理者の答え「神があなたがたのために袋の中に宝を入れてくださった」(23)
- E' 兄弟たち、家に招かれ、もてなしを受ける(24-25)
- D' 兄弟たち、ヨセフを伏し拝んであいさつする(26-28)
- C' ヨセフ、ベニヤミンに会う;ヨセフ泣く;食事が出される(29-31)
- B' ヨセフ、ベニヤミンを特別に処遇する(32-34b)
- A' 兄弟たち、自由に飲み食いする(34c)



## [創世記44:1-34(ストーリー9)の構造]

- a ヨセフ、家の管理者に計略を指示する(1-2)
- b 兄弟たち、帰途につく(3-4a)
- c ヨセフ、家の管理者に計略を指示する(4b-6)
- A x 兄弟たち、無罪を主張する(7-10)
  - c' 家の管理者、計略どおり銀の杯を発見する(11-12)
  - b' 兄弟たち、衣を裂き町に引き返す(13)
  - a' ヨセフ、計略どおり兄弟たちの罪をとがめる(14-15)
- X ユダ、兄弟たちの罪を認める(24-29)
  - a ヨセフの裁き:ベニヤミンが取られる(17)
  - b ユダ、裁きの撤回を願う(18)
  - c ユダ、最初のエジプト行を語る(19-23)
  - A' x 兄弟たち、父の前で無罪を主張する(24-29)
    - c' ユダ、ベニヤミンが戻らない場合の予想を語る(30-31)
    - b' ユダ、裁きの撤回を願う根拠を語る(32)
    - a' ユダ、ベニヤミンの身代わりを申し出る(33-34)

## [創世記45:1-28(ストーリー10)の構造]

- A ヨセフ、自分の素性を兄弟たちに明かす(1-4)
- B ヨセフ、兄弟たちに語る:神による恵み(5-8)
  - C ヨセフの招き(9-13)
    - X ヨセフ、兄弟たちを抱きしめる(14-15)
    - C' パロの招き(16-21a)
  - B' ヨセフによる恵み:ヨセフ、兄弟たちに語る(21b-24)
- A' 兄弟たち、ヨセフの生存を明かす(25-28)

## [創世記46:1-30(ストーリー11)]

- A 神、ベエル・シェバで夜の幻を通してイスラエルに語る(1-7)
  - X ヤコブの系図 [ヨセフのストーリー全体の中心部](9-27)
- A' ヨセフ、エジプトでイスラエルに現れる[幻が現れる意味でのみ使われる単語](28-30)

## [創世記46:31-47:27(ストーリー12)]

- A ヨセフ、家族がパロの好意を得られるよう準備する(46:31-34)
- B ヨセフ、兄弟のうち五人をパロに引き会わせる(47:1-2)
- C 兄弟たちがエジプトに来た理由:ききん(47:3-4)
  - D パロの布告:ヨセフの家族をエジプトに住ませる(47:5-6)
    - X ヤコブ、パロを祝福する(47:7-10)
    - D' ヨセフ、家族をエジプトに住ませる(47:11-12)
    - C' ヨセフが銀を集めた理由:ききん(47:13-19)
  - B' ヨセフ、民から収穫の五分の一をパロに納めさせる[祭司 は例外](47:20-26)
- A' イスラエル人、エジプトで繁栄し増える(47:27)

多くの中心的なテーマにおいて、会話の重要性を強調するためにキアスマスが用いられる。創世記47:7-10は強調としてキアスマスが用いられている好例である。

## [会話の強調] 創世記47:7-10

- a ヤコブ、パロに引き会わされる(7a)
- b ヤコブ、パロを祝福する(7b)
  - c パロの質問(8)
  - c' ヤコブの答え(9)
- b' ヤコブ、パロを祝福する(10a)
- a' ヤコブ、パロの前を去る(10b)

## [創世記47:28-48:22(ストーリー-13)]

- A ヨセフの約束:イスラエルをカナンに連れ戻す(47:28-31)
- B ヨセフ、イスラエルの祝福を求めてマナセとエフライムを連れてくる(48:1-12)
- C イスラエル、手を交差してヨセフの子らを祝福する(48:13-14)
  - X イスラエル、ヨセフを祝福する(48:15-16)
- C' ヨセフ、イスラエルが手を交差していることに抗議する(48:17-18)
- B' イスラエル、エフライムとマナセを祝福する(48:19-20)
- A' イスラエルの約束:神がイスラエル人をカナンに帰してくださる(48:21-22)

## [創世記49:1-33(ストーリー-14)]

- A ヤコブの息子たち、ヤコブのもとに集まる(1)
- B 預言の始まり(2)
- C レアの息子たちへの祝福(3-15)
  - D ビルハの一番目の息子への祝福(16-18)
    - X ジルバの息子たちへの祝福(19-20)
  - D' ビルハの二番目の息子への祝福(21)
- C' ラケルの息子たちへの祝福(22-27)
- B' 預言のおわり(28)
- A' イスラエル、自分の民に加えられる(29-33)

## [創世記50:1-26(ストーリー-15)]

- A イスラエルの埋葬の計画(1-3)
- B ヨセフ、パロに願う(4-6)
- C イスラエルの埋葬の準備(7-9)
  - X イスラエルの悲しみ(10-12)
- C' イスラエルの埋葬(13-14)
- B' 兄弟たち、ヨセフに願う(15-21)
- A' 埋葬の計画とヨセフの死(22-26)

## 創世記50章の重要性

創世記50:1-26のキアスマスは際立っており、ヨセフのストーリーを特徴づけている。このキアスマスの中心は、イスラエルの死に対する深い悼み悲しみである。創世記50章には、ストーリーの主題を指し示す単語やキアスマスが多い。クライマックスに向かい、クライマックスを過ぎると、それ以前とは流れが反転し、ヨセフのストーリーを完結させる。

本文にははっきりとした統一性があるが、それはキアスマス構造になっているためばかりではなく、創世記50章全体が有機的につながっているためでもある。文学的にも美しく統一されているのだ。

## 創世記50章の概略

「ストーリー-15」のA~Cは父親に対するヨセフの忠実さを強調する。ヨセフは、父の存命中に忠実であった(創世記37:2, 13)ように、その死に際しても忠実である。創世記47:29の約束と、その成就である50:4-8を対比されたい。

C'~A'は結びであるが、創世記50章だけでなくヨセフのストーリー全体の結末でもある。イスラエルは先祖たちとともに葬られ、ヨセフの兄弟たちの請願が行なわれ、最後にヨセフ自身が葬られる。

## 創世記50章 A-A'の関係

創世記50章のキアスマスはこの章が重要性であることを示す。AとA'はそれぞれ導入と結語であり、キーワードは「死」と「約束」である。

ヤコブは12人の息子たちを祝福した後、自分がこれから死んで先祖たちに加えられることを告げる。ヤコブは、ヨセフとその兄弟らに誓わせて、マクペラのほら穴に自分を葬るように指示した。これは他の族長たちや彼らの妻たち、またヤコブの妻だったレア(ラケルについては明記されていない)も葬られている場所だ(創世記49:29-32)。最後の指示を与えた後、ヤコブは147歳の生涯を終える(創世記47:28)。

A'はAの繰り返しであり、両方において死者をミイラにする話が語られる。前者はヤコブ、後者はヨセフである。

また、AとA'の記述には対位法も使われている。ヨセフは父との約束を果たすために、カナンへの長い移動に耐えられるよう、死んだヤコブをミイラにする。それからヨセフは兄弟たちに(つまりその子孫にも)約束させて、神が彼らをエジプトからカナンに連れ出すときには自分の骨を携え上るよう指示した。結果的に、骨が風化してちに帰らないように彼らを選んだ方法は、ヨセフをミイラにすることであった。

- A イスラエルの埋葬の計画 (50:1-3)
  - a ヨセフ、泣き悲しむ(1)
  - x ヨセフの命令 (2-3a)
  - a' エジプト、泣き悲しむ(3b)
- B ヨセフ、パロに願う(50:4-6)
  - a ヨセフ、パロの家に願う(4a)
  - x ヨセフの願い(4b-5)
  - a' パロ、ヨセフの願いを聞き入れる(6)
- C イスラエルの埋葬の準備 (50:7-9)
  - a カナンに上るヨセフの一団 (7a-8)
  - x エジプトに残る一団 (8b)
  - a' カナンに上るヨセフの一団の詳細 (9)
- X イスラエルの悲しみ (50:10-12)
  - a 哀悼の場所と期間(10)
  - x カナン人、葬儀を見る(11a-b)
  - a' 葬儀が地名に反映される(11c)
- C' イスラエルの埋葬 (50:13-14)
  - a カナンへ下る(12-13a)
  - x イスラエル、カナンに埋葬される(13b-c)
  - a' エジプトに帰る(14)
- B' 兄弟たち、ヨセフに願う(50:15-21)
  - a ヨセフの兄弟たち、恐れる(15)
  - x 兄弟たち、ヨセフの前にひれ伏す:ヨセフの夢の成就(16-18)
  - a' ヨセフ、兄弟たちに赦しを再び約束する(19-21)
- A' 埋葬の計画とヨセフの死 (50:22-26)
  - a ヨセフの年齢(22)
  - x 兄弟たち、ヨセフとの約束を覚える(23-25)
  - a' ヨセフの年齢(26)

### 創世記50章 B-B'の関係

B-B'は、ヨセフのストーリーに含まれる独立したいくつかの主題をつなぎ合わせるための対句である。ヨセフは父を埋葬しに行かせてくれるようパロに願い出る。このとき、この願いは間接的にパロに伝えられた(50:4)。同じように、罪の赦しを求める兄弟たちの願いも、彼らの父を通して間接的に伝えられている(50:16)。

### 創世記50章 C-C'の関係

Cにおいて、ヨセフの家族を含む親族、パロの高官、貴族たちの大きな一団がカナンへ上る(50:7-9)。目的はヤコブの埋葬であった(50:7a)。しかし、C'(50:13-14)までではじめて実際にヤコブの埋葬が行なわれる。

### 創世記50章 折り返し点

折り返し点はX(50:10-12)である。葬儀の期間は、ヤコブの死に対する人々の嘆き悲しみを表す。かつて嘆き悲しむ者はヤコブ自身だった(創世記37:33-35, 42:36, 43:14)。しかし今やヤコブは平安のうちに死を迎えた。今度はヨセフが生きた者となり(46:30)、ヨセフとともにいる者たちが嘆く者となった。

創世記50章の半分以上がヤコブの死の嘆きと葬儀のストーリーで占められている。

ヨセフ自身も嘆き悲しみ(50:1)、ついでエジプト人が悲しむ(50:3)。ヨセフとエジプト人たちは大がかりな葬儀の準備を始める(50:2)。故郷で父を埋葬したいというヨセフの願いはパロに承認された(50:4-5)。

彼らがカナンの地にヤコブの遺体を携えていくことができるようにパロは「非常に大きな一団」を用意した。「パロのすべての家臣たち・エジプトの国のすべての長老たち」(50:7)、また戦車と騎兵がヨセフに伴った。地元の住民カナン人もこれを見て「エジプトの荘厳な葬儀」(50:11)と称した。

細部がよく描かれているために、葬儀の荘厳さが強調されている。



## 結論

本書の冒頭において、ヨセフ物語の構造が綿密に設計されたものであると述べた。この結論が正しいことは、キアスマスによって対になった要素がテーマ語によって関連づけられていることと、キーワードによって各要素が直線的に連結されていることによって証明することができた。

テーマ語、キーワード、折り返し点によるストーリー構築は、感動とサスペンスに満ちたヨセフ物語の芸術的技巧の筆頭である。

この構造を見るときに、古くから人々がヨセフ物語を真に最も美しい物語であると認めてきたことにはやはり理由があったのだと再認識させられる。

ヨセフ物語のキアスマス構造と中心テーマ、およびそれらを取り巻くように展開される同心円的な対称性が明らかになった今、ヨセフ物語の目的を理解するための正しい道筋を得たといえる。構造の対称性を見落とすと、「概念の中心」を見失う。結果として、もとのメッセージをゆがめるのだ。そればかりか、キアスマスの対称や強調を読み取るセンスも得られずに終わってしまう。

ヨセフ物語のキアスマス構造を調べる目的のひとつは、熟慮の上で綿密に設計されたアウトラインを明らかにする

ことである。したがって、それについて議論しなければ、構造が重要なポイントであるはずのヨセフ物語のアウトラインの関連や重要性を過小評価してしまうことになる。

ヨセフ物語のキアスマス構造の最も重要な意味は、それ自身が資料批判に対する反論になるという点だ。資料批判には、テキストを粉々に砕いて顕微鏡で見ようとする癖がある。これらの碎片は「J」「E」「P」などと命名されるわけだ。これに対して文学的アプローチは、視点をぐっと後に引く。こうして得られる広角度の視野を活かし、ひとつの文学作品が全体としてどのように機能しているかを明らかにすることができる。

最後に、次のように言うことが適切であろう。つまり、キアスマスは、ひとつの大きなテキストの特定の部分が後代になって継ぎ足されたものかどうかを見極めるための良い基準を提供してくれる。また、キアスマス構造を無視してテキストを切り刻む資料批判のアプローチに対する反論でもある。それらの「仮説資料」の断片がやたらと継ぎ足されたあげく実際みられるようなキアスマス構造が形成されてしまった原因をうまく説明できないのであれば、「仮説資料」はやはりただの仮説であって、そのような断片はもともと存在しなかったのである。

